誰かが歌っている

Somebody Sing

トム・レオポルド［著］
岸本佐知子［訳］

白水社

誰かが歌っている

白水社

Somebody Sing

トム・レオポルド 著　岸本佐知子 訳

訳者略歴
一九六〇年生
上智大学文学部英文科卒
アメリカ文学専攻
主要訳書
J・リース「カルテット」（早川書房）
M・アトウッド「ダンシング・ガールズ」（白水社）
T・レオポルド「君がそこにいるように」（白水社）
S・ミルハウザー「エドウィン・マルハウス」（福武書店）
J・ウィンターソン「さくらんぼの性は」（白水社）

新しいアメリカの小説
誰かが歌っている
一九九二年八月一〇日印刷
一九九二年八月二五日発行
訳者 © 岸本佐知子
発行者 藤原一晃
印刷者 田中昭三
発行所 株式会社 白水社
東京都千代田区神田小川町三の二四
営業部〇三（三二九一）七八一一
電話 編集部〇三（三二九一）七八二一
振替 東京 九―三三二二八
郵便番号一〇一
理想社・加瀬製本
ISBN 4-560-04480-5
Printed in Japan

誰かが歌っている

First published in the United States in the English language under the title of SOMEBODY SING by Tom Leopold. Copyright © Tom Leopold, 1990. Published by arrangement with DUTTON, an imprint of New American Library, a division of Penguin Books USA Inc. through Japan UNI Agency, Inc.

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

おまえの唇にキッスすりゃ
おいら後ろに宙返り
――ジャッキー・ウィルソン

妻に捧ぐ

（彼女はいつだって正しい）

1

土曜日の朝、僕はこれからペグと会うために出かけるところだ。落ち合う場所はいつもと同じ、セントラル・パークの〈タヴァーン・オン・ザ・グリーン〉の前。彼女はその近くに、小さいけれども感じのいいアパートを借りて住んでいる。僕のほうは、このバンク・ストリートで新築の、値段がやたらと高かったわりには居心地が悪い、寝室二つ付きのアパートに住んでいる。そんなことはともかくとして、もしクィーンズのいかれたティーンエイジャーたちを満載した車がほんの気まぐれで僕の自転車をはね飛ばしたりせずに、無事に目的地まで着くことができたなら、僕はペグに結婚を申し込むつもりなのだ。

自転車を押して廊下に出ると、向こう脛のいつもと同じ場所に、またペダルがぶつかる。エレベーターに乗って下の通りに出る。寒いけれど、日は照っている。顔を太陽の方に上げたままズボンの裾を折り返し、愛馬〝ペイント号〟にまたがる。シュイン社の黒と白のツートンカラー、誕生日にペグがプレゼントしてくれたものだ。僕の気分は最高に高まっている。一刻も早く彼女のところへ行って、プロポーズをしなくては。これが詩なら、さしずめ〝彼女のもとへ飛翔する〟とでも言うところだ。

いかにも〝今日ニューヨークに着いたばかりです〟的な若夫婦が僕を振り返り、指さして、テッド・ウェンデルよ、と声を上げる。あなたってほんと面白いわ、最高よ。

「ありがとう、そう言ってくれるとうれしいよ」もちろん僕の名前はテッド・ウェンデルではなく、サンディ・バヤードなのだけれど、そちらは誰も覚えてくれない。ショウ・ビジネスの世界に足を踏み入れて苦節何年か、今年に入ってやっと本物のツキに恵まれ、いまや僕は、テレビとしてはそう悪くない『十一時になりました、テッド・ウェンデルです』という番組で主役を張っている。僕が演じているのは、いつもバラ色の夢ばかり見ている、ウォルター・ミティ風のニュースキャスターだ。

長年この世界でぐずぐずしているうちに、いつの間にか、たとえ自分にツキがめぐってきたとしても、せいぜい三流連続コメディ番組がいいところだろう、という考えがしみついていた。姉が急死して、こまっしゃくれた小学生の娘を引き取るはめになる独身男の役とか——まあ、たとえばの話だ。ところが、いま僕が出ているこの番組は、けっこういい。いい？　まあ、悪くはない。友人のハリーに言わせれば、ダメなTV番組よりも我慢がならないものがこの世にあるとすれば、それはいいTV番組らしい。僕もそう思う。しかし、この番組のおかげで僕は大人になってから初めて安定した収入にありつけたわけだし、無一文時代みたいに、自分のやっている役が恥ずかしくて人に言えない、ということもない。そんなわけで、いまの僕は大いにハッピーというわけだ。

アビンドン・スクエア・パークの手前で、ホームレスの男を大きくよけて通る。彼とは顔なじみだ。毎日必ず金を恵んでいるのだ。男は僕が止まりもしないのに〝おありがとうございま〟の仕草をする。僕をうしろめたい気分にさせてやろうという腹だ。「プロポーズしに行くところなんだ！　取り込み中！」どうやら、あまり説得力はなかったようだ。

公園では、着ぶくれた子供たちが黄色い声を上げながら転げまわっている。ニューヨークでなければ、こんな小さなセメントのオアシスは、子午線を示す植え込みぐらいにしか思われないだろう。

八番街をアップタウンに向かう。茶色い紙袋に缶ビールを隠したクールでマッチョなスパニッシュの男たちが、西部の新参者でも見る目つきで、僕と、ハンドルのところにひらひらの吹き流しのついた古めかしい僕の自転車を見る。かまうもんか。今日の僕は誰よりもクールなんだ。スパニッシュでも何でもかかって来い、だ。この自転車は僕の世界一の恋人がプレゼントしてくれたものなんだ。それだけでもうこれは最高級の、べらぼうに恰好いい自転車なのさ。

僕がテレビで演じているテッド・ウェンデルという男は、毎回ニュースに巻き込まれ、ニュースにさんざんな目に合わされるニュースキャスターだ。とは言うものの、全国ネットワークでお目にかかることはできない。ケーブルTVの番組なのだ。そんなわけで、全国規模のスターに比べると有名度は三分の一、収入も二分の一しかないけれども、カリフォルニアまで収録に行かなくて済むし、僕は生まれて初めて車を買うことさえ本気で考えている。

ペグと初めて会ったのはとあるパーティで、彼女は料理のケータリングをやっていた。ついでに、そのパーティは別の女性が僕の三十三回目の誕生日に開いてくれたものだという事実も付け加えておくのが筋というものだろう。ヘレンは完璧にいかしてて、完璧にイカれている女だった。つき合って二か月目だった。誓って言うけれど、その二か月のあいだに僕はそんなに気合の入ったトレンディな誕生パーティを開いてもらうようなことを何一つしていなかった。ヘレンは僕に入れこんでいた。僕を特別に愛していたというわけではなかったし、好きでさえなかったんじゃないかと思う。とにかく僕に入れこんでいたのだ。しかし、確かに〝トレンディ〟な女ではあった。ドキュメンタリー映画の

監督で、アステカの奴隷みたいな足環をつけ、後半ラウンドのボクサーがコーナーでするみたいに脚をがばっと広げて座った。さあ覗いてごらんなさいよと男たちを挑発していた。〝あたしは非商業的なテーマでドキュメンタリーを撮ってる女よ、もし這いつくばってビーヴァーを拝みたいんなら、どうぞご自由に〟と言わんばかりのポーズだ。

一時期は彼女のことが本当に好きだった。でも彼女は三十代の後半だったし、それまで全然考えてみなかったことを、僕の時になって急に考え始めてしまったようなのだ。僕のほうにそれ以上彼女との関係を深めるつもりがなかったというのではない。ただ、ある日突然、彼女のほうで、僕にそんなつもりがあるはずがないと、真っ向から決めつけてしまった。

ヘレンが急にそんな風になって、僕はどうしていいかわからなかった。おまけに、彼女は所かまわずコカインをやるようになった。僕としては、その手のものは極力やりたくなかったし、それ以後も一度もやっていない。だがヘレンは、やればたちまち、着用するのに当局の許可がいるような下着姿で寝室から出てきて、一秒後には、ヒトラーでさえエヴァ・ブラウンに持ちかけるのをためらうようなセックスに突入してしまうのだった。早く彼女から逃げ出さないと、そのうち逃げ出す気力さえ失せてしまいそうだった。

ヘレンはもうずっと前からこのパーティを計画していたし、前にも言ったように、彼女のことは好きだったから、招待状を出してしまった後で別れたりして彼女に恥をかかせたくなかった。ヘレンはこの日のために、某有名女優からダコタ・ハウスの広いアパートメントを借りていた。前にこの女優のドキュメンタリーを撮ったよしみだ。四十種類ものチーズ、新品のポリバケツになみなみと注がれたピンク・シャンパン、それにプラスすることペグの店の料理。どえらいことになってしまった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

僕が言うのも何だが、ペグはニューヨークの混み合ったパーティでまっさきに目を引くようなタイプではないと思う（来ていた人の半分はヘレンの友達で、僕の友人たちよりも数段魅力的だった――とはいえその魅力は、きらびやかな暮らしの代償に吸うひっきりなしのタバコと、自分の才能への現実の、あるいは思い過ごしの不安のために、どこか引き攣れて見えた）。ペグはそこに、ケータリング・サービスのアシスタントとして来ていた。

ペグを最初に見かけたのは、旧友のジャック・パークと話している時だった。彼女はテーブルの上に、まるでティファニーのウィンドウにダイアモンドを飾るみたいな手つきでオードブルを並べていた。小柄な女の子で、明るいブロンドの短い髪を赤いリボンで後ろに束ねていた。白いエプロンにも同じ赤いリボンがついていた。その時、僕はジャックにこう言ったのを覚えている。「人妻じゃなかったらどうしようって男が思うタイプの子だよな」

「ああ」ジャックは言った。「ああやってスモークト・サーモンをスライスする手つきなんざ、まるで自分の可愛いエンジェルたちに食べさせてやるみたいだぜ」もちろん僕らはその少し前に馬鹿でかいジョイントを吸ったばかりだったが、自分たちが何を言っているのかはまだわかっていた。ヘレンは昔付き合っていたヨーロッパの男といちゃついていたし、どっちにしても僕は腹ぺこだった。

「料理、すごくおいしいよ」

「お誕生日おめでとう」とペグは言った。

「ああ、ありがとう」

別にデートに誘うとか、そんなつもりはなかった。付き合っている人間がいるのにそういうことをする奴らは嫌いだ。どんな相手と付き合っていようが、その相手がこっちのことを屁とも思っていな

かろうが、そんなことは問題じゃない。そんなことをすれば、デートをしたいと思う人間に最低の奴だと思われるに決まっているし、もし最低の奴だと思わないような相手なら、どっちみちデートになんか誘いたくない。自分でも何を言っているのかよくわからないけれど、とにかく僕はそんな人間のクズじゃないってことを言いたいのだ。

ペグは薬指に指輪をしていなかった。その代わり、別の指にヴィクトリア調のアンティークな指輪を二つしていた（二つともお祖母ちゃんのものだった。ペグはお祖母ちゃんが大好きなのだ。僕もたぶん彼女のお祖母ちゃんを大好きになれると思う）。

ともあれ、パーティはつつがなく終わった。僕は愉快なプレゼントをいくつかもらったが、全部僕の友だちからで、ヘレンの友だちからのは一つもなかった。その晩、僕らは互いに上の空でセックスをした。そしてそれから一週間と経たないうちに、ヘレンがもう終わりだと宣言した。僕らは〝全然うまくいってない〟し、そもそも〝セックスが最低〟だからという理由で。僕は彼女にこれまでの最低のセックスの数々を詫び、出会って以来最高にハッピーな気分で彼女とおさらばした。

〝最低のセックス〟の一件以来しばらくのあいだ、僕は恋の湿った矢先から身をかわして暮らした。けれどもそのうち、まあ、何というか寂しくなってきた。当時の僕はまだ今みたいな三分の一有名人ではなかったし、テッド・ウェンデルの収録を間近に控えてふところ具合も暖かかった。そこでよく晴れたある夏の週末、それは誕生パーティやらヘレンやら何やかやからまだそう経っていないころのことだったが、僕はアップタウンを目指して長い散歩に出かけた。自分に何かプレゼントしようと思った――見もしない小型テレビとか、締めもしないラルフ・ローレンのネクタイとか、そんなものだ。マディソン街のホイットニー美術館の向かいあたりにさしかかったとき、軒先に赤いおんどりの看板

をぶら下げたグルメ・ショップが目に止まった。あのパーティで料理をケータリングした店も、たしか〝レッド・ルースター（赤いおんどり）〟という名前だった。ペグがその店にいるかどうかはわからなかった。この街に何軒の〝赤いおんどり〟があるのか、ペグが店で働いているのかそれともパーティだけの要員なのか、僕は知らなかったし、もしかするとその日は非番かもしれなかった。ところが、いた。彼女はちゃんとそこにいたのだ。

時刻は十一時半ごろで、店の中にはリッチな客がちらほらしていた。高い美容院で髪をセットした三十代後半の女の客が、僕より数段身なりのいい小さな男の子の手を引いていた。それに車椅子に乗ったものすごく高齢の老人と、ドイツ人風の骨太な看護婦の二人連れ。

「イッァーク・パールマンに出したのと同じ料理を作ってちょうだい」美容院に金をかけた女は、金持ち特有の押しの強さでそう言った。ペグがパールマン料理を約束すると、彼女は息子を引きずってずんずん出口に進み、「火曜日よ！」と言い捨てて出ていった。ペグは車椅子の穏やかな老人の方を振り向こうとして目を上げて、僕に気がついた。頭の中でＭＧＭ映画のオーケストラが鳴り響いたようには見えなかったけれども、たぶん彼女は喜んだんだと思う。本当のことを言うと、よく覚えていない。彼女と結婚するなんて考えもしなかったので、その瞬間に関して特に人間学的な考証を加えたりはしなかったのだ。

ペグは老人の注文を聞いていた。「チキンサラダとペルグリーノ・ウォーターを二人前」――老人が顔を上げて看護婦を見ると、看護婦は静かに笑ってうなずいた――「それからフォークとナプキンを。公園で食べるのでね」

ペグはにっこりして、言われたものを集めはじめた。店にはもう一人、ペグより二回りくらい大き

くて、いい意味で女らしい〝愚直さ〟を漂わせた、にこやかな女の店員がいた。僕がメニューを調べるふりをしていると、彼女は次の客の応対をした。僕は冷蔵ケースのカウンターの方に近づいた。一九四〇年代の農場から持ってきたみたいな造りだった。僕はガラス越しに、ペグがグルメな食べ物をすくい取るのを眺めた。

「やあ、ダコタのパーティで会ったよね」

「ええ、覚えてるわ」

「じつはパーティを開いてくれた彼女に、セックスが最低なせいでふられちゃってね」

「お料理のせいじゃないといいんだけれど」

僕は笑った。「いや、ほんとなんだ、単にセックスが最低だっただけなんだ。知り合ったばかりでこんなに手の内全部明かしちゃ、まずいかな？」

ペグも笑った。「かもね」彼女が老人の方を向くと、老人はたたんだ札を看護婦に渡し、看護婦がそれをペグに渡した。僕はドアまで行って、看護婦が車椅子を押して出ていくあいだ、ドアを押さえていた。

「何にしましょう」大きな店員が僕に言った。

「ええと、そうですね」補導教官と話しているみたいで、おっかなかった。

「あそこのすごくおいしそうなチキンサラダを半パイントもらおうかな」

ペグはわりとすんなり、翌日のランチを一緒に食べることを承知してくれた。別に僕がピアース・ブロスナンだったからじゃなくて、事はいたってシンプルだったのだ。ペグはとてもさらりと僕に好意を持っていることを示してくれたし、それで僕のほうも手応えを感じた。それに彼女は誰とも付き

合っていなかったし、僕も別れたばかりだった……。

いや、もっと正直に言おう。僕はそれまでにもペグみたいな女の子を何人も知っていた。まあ怒らないでほしい。なにも〝北アメリカの女はみんな俺のもんよ〟的な意味で言っているのではない。僕はそれまで何年も、何とか結婚するまいとして、その一方ではまさにペグみたいなタイプの子を探し求めていた。そしてその子が完全にはペグ的でないことを確かめては、ああまた会わずにすんだ、これでまた遊んで暮らせる、と安心することを繰り返してきた。

そもそも、最初のランチがいい例だった。僕は店で彼女と落ち合い、二人でセントラル・パークまでぶらぶら歩いた。よく晴れた、オレンジと緑がきらきら踊っているような日だった。ペグは赤い籐のバスケットの中に、レモンジンジャーティーと、家で作った食べ物を入れてきた。

ペグが作る料理は、今なお汲めども尽きぬ驚きの泉だ。グルメ雑誌から抜け出たみたいな芸術作品なのだ。店で覚えたレシピあり、彼女自身のたゆまざる錬金術の成果あり、その両方のミックスという場合もある。物の味がこんなにもカラフルで感動的だったということを、僕は初めて知った。あんまり感激して、食べ終わるといつも疲れ果ててしまうくらいだ。

とにかく、楽しいピクニックだった。印象派の画家の前でポーズを取っているような気分だった。僕はこの華奢なブロンドの娘に、恋をするというよりも引き込まれてしまった。一目惚れの恋と言うけれど、僕らは会う前からもう恋をしていた。三日か四日、たて続けにデートをした。僕は彼女と寝たかったが、彼女はノーと言った。ある晩、たしか三度目のデートの後、僕の古いアパートメントで、ペグは口ごもりながら一生懸命にそのわけを説明した。「いつかきっとあなたにもわかるわ」そう彼女は言った。

今わかったような気がするよ、ペグ。僕の自転車は、二十三丁目にさしかかっている。

そして今では、時間がかかったことを感謝している。ペグは素晴らしい女性だ。おかしな話だ。なぜって、この世紀末、人口が三人以上の国は残らず核兵器を持ち、州立公園のジョーンズ・ビーチは皮下注射の針でびっしり埋まり、オゾン層はあと十二分しかもたないっていうときに、僕は自分が本能的に惹きつけられた女性が一回目のデートでものにならなかったことを喜んでいるのだから。

そして初めてセックスをした時、僕らのあいだに何か新たな素晴らしい要素が、火のように熱い塊が生まれて、それはいまでも消えずに燃え続けている。

僕らは数え切れないほどたくさんの芝居を一緒に観た。そして時には張り込んで、リンカーン・センターの近くにある〈カフェ・デ・アーティスツ〉で食事をした。そんな特別の夜、いつものデートの時のはしゃいだ気分は影をひそめて、ペグは僕のパートナーになった。二つの人格が溶け合って、一つの"me"になった。

けれど、僕は一人のものになることがどうしてもできなかった。一つの関係に縛られるなんて！女の子たちとのお楽しみのない人生なんて、僕には考えられなかった。向こうから寄ってくるものをむざむざ諦めることが、いまさらどうしてできようか。でも僕はペグを本気で好きになりつつあったし、そうこうしているうちに夢中になってしまった。彼女は何も言わなかったけれど、この状態が永遠に続くわけがないのは僕にもわかっていた。

ペグは小鳥だった。僕の中ではいろいろな考えがせめぎ合い、雨嵐と吹き荒れているのに、ペグは枝にちょこんととまり、ただじっと待っているだけだった。でも、いずれ彼女は飛んでいくか、風に飛ばされるかしてしまうだろう。僕を愛しているけれど、僕から離れていくかもしれない。手の届か

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com